

## ドストエフスキイ研究会便り (2)

この「研究会便り」では、前回(1)で記したように、今までドストエフスキイ研究会が取り組んで来た様々な作業について、順次報告をしてゆく予定です。

今回は当研究会設立の趣旨と、30年近くにわたる活動の大きな流れを[1]～[8]にわたって記し、その中の[7]早稲田大学における講演記録(「アリョーシャとイワンの聖書—モスクワ時代、イエス像構成の一断面—」)を主なテキストとして取り上げました。

<http://apop.chicappa.jp/wordpress/> (2015年5月更新版)

その後、今年の4月には芦川が長年取り組んで来たカラマーゾフ論が完成し、河合文化教育研究所から出版の運びとなりました。

### 『カラマーゾフの兄弟論—砕かれし魂の記録』

河合文化教育研究所、2016年、4月20日発行

早大での講演も、『カラマーゾフの兄弟論』で既に取り上げられていたものの中から一部を取り上げてお話ししたのですが、「研究会便り」もなお今回(2)と次回(3)の二回は、この本で扱った聖書テーマについて改めて取り上げ、それらが大巾に加筆修正する形にしたいと思います。叙述形式は論文形式となり、『カラマーゾフの兄弟論』のいわば「後<sup>あと</sup>薩<sup>ざん</sup>」・「補論」のような形となるのですが、ドストエフスキイ世界の底知れぬ深みと豊かさを前にする時、このように繰り返し同じテーマと取り組み続けることは避けられないと感じています。対応する『カラマーゾフの兄弟論』の部分も示しておきますので、興味のある方はそれらをセットで読んで頂き、ドストエフスキイ文学が持つ重要なテーマに関して、皆さんの思索を深める参考として頂ければ幸いです。

今回は、前回の予告通り、カラマーゾフ家の家長であるフョードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフに焦点を絞りたいと思います。(フョードルと聖書のテーマは、『カラマーゾフの兄弟論』第IV章で取り扱っていますが、今回はそれを大幅に加筆しました)。カラマーゾフ家の父親であるフョードルは、異教的原始的生命力の権化とされ、作者によって「好色漢」とか「道化」とか規定されるのですが、いざ我々が正面からこの人物を捉えて言葉にしようとする、出来合いの概念や言葉をいとも簡単にすり抜けてしまうのです。聖書との関係においても、作者ドストエフスキイはこの人物を、単に聖書を利用する<sup>ベグンテック</sup>術学的な道化という以上の驚くほどの奥行きと<sup>ベグンテック</sup>拮据を以って、聖書知識をその内に込み込ませた厄介な存在に仕立て上げています。この「煮ても焼いても喰えない」存在には、ドストエフスキイという作家の本質に連なる<sup>ベグンテック</sup>鉅脈が露呈しているものとして、我々は心して取り組む必要があるでしょう。当研究会が積み重ねてきた作業も、正にこのようなドストエフスキイと聖書世界との生きた繋がり<sup>ベグンテック</sup>の解明に他なりません。

## 道化フォードルの聖書

### はじめに

フォードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフ。

『カラマーゾフの兄弟』の冒頭で筆者が、「何かある種独自の民族的な桁外れ」と紹介する成り上がりの地主フォードル。二人の妻に生ませた子供三人を次々と「忘れ去り棄て去り」、我が家を快樂の「巢窟」と化し、更には宗教的痴愚である知恵遅れの乞食女に生ませたとされるスメルジャコフを、料理係の下男として使う家長フォードル。神学生ラキーチンが「情欲が炎症を起こすほど」と断じるカラマーゾフ家の中で、成長した長兄ドミートリイとの間に、「牝犬」グルーシェニカを巡り壮絶な争いを繰り広げる好色漢フォードル。「神と不死」の探求者として帰郷した末子のアリョーシャに向かつては、己の不信と不安を正直に告白する不信の徒かつ冷笑家フォードル。またこの天使を前に「あと二十年は男でいる」ことを宣言し、そのため出来るだけ多くの金を貯め込もうとする吝嗇家で享樂的生命主義者フォードル。更には父親のニヒリズムとシニシズムを受け継ぐ次兄イワンからは「イソップ爺」とも「毒蛇」とも忌み嫌われ、遂にはこのイワンの異母兄弟であり「前衛的肉弾」スメルジャコフによって脳天を叩き割られる父親フォードル。この男を言い表すべき言葉は多い。だがそれら全てを以ってしても究め尽くし難い存在、それがフォードル・パーヴロヴィチ・カラマーゾフである。

このフォードルが聖書について語る語り口には、筆者の言葉通り「何かある種独自の」響きが宿り、彼が聖書を殆んど自在とも言うべき鮮やかな手際で用いる道化芝居には驚くべき才知が閃く。フォードルの聖書知識に分け入ることは、その心の中に「聖なるもの」についての観念が、またその人間観と世界観と歴史観が、否定の方向であれ肯定の方向であれ、如何なる形で存在するのを探る上での大きな手掛かりを得ることに繋がるであろう。そればかりか、広くカラマーゾフ世界の聖書的磁場とは何であるかを知る上での、またドストエフスキイが描き出した異教的原始的とさえ言えるカラマーゾフ的生命力とは何であるのかを考える上での、具体的な手掛かりを手にするにも繋がると思われる。

### 「場違いな会合」

「場違いな会合」と題された『カラマーゾフの兄弟』の第二篇。その舞台は「家畜追込町」の郊外にある修道院である。ここに主要な登場人物のほぼ全員が集結し、死を明日に控えた聖者ゾシマを相手に「神と不死」の問題を巡り、各人がそれぞれの内面を次々と曝け出してゆく。息を吞ませるこの圧倒的な出だしにおいて、読者の前には早くも『カラマーゾフの兄弟』の主要テーマのほぼ全てが提示されるのである。

今回我々が光を当てるのは、主にこの「場違いな会合」において家長フォードルがゾシマ長老を相手に演じる瀆神的道化芝居であるが、そこから浮かび上がることは彼が聖書、殊に福音書を読みこなす視点の「何かある種独自の」異様さ、と言うよりはユニークさで

ある。それはただ単に「瀆神的」とか「異教的」とか「原始的」等々の言葉で言い現わして片付くものではなく、彼の聖書への切り口そのものが、本来ユダヤ教やキリスト教の出発点にあった荒々しい原初的宗教性、R.オットーの言う「神靈的なもの」「ヌミノーズ」に我々を導き入れる類のものであるとさえ思わせるものである。作者ドストエフスキイは、聖書というものが持つ底知れぬ豊饒さと奥深さと神聖、そしてまた懼しさと不思議と謎を、フョードルの瀆神的道化芝居を通して探り、表現しようとしていたのではないか。

以下に、フョードルの聖書的道化をAからGまでの7つに分けて検討してゆこう。

- A. ルカ福音書 (1) 「主よ、今こそ」
  - B. 旧約詩篇 「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり」
  - C. ルカ福音書 (2) 「幸福なるかな、汝を宿せし胎」
  - D. ルカ福音書 (3) 「われ永遠の生命を嗣ぐためには」
  - E. ヨハネ福音書 「汝らは己が父悪魔より出でて」
  - F. ルカ福音書 (4) 「この女の多くの罪は赦されたり」
  - G. 「最後の一幕」。悪魔の系譜。フョードルからイワン、そしてスメルジャコフへ
  - H. フョードルと「聖母マリア」との対決
- おわりに

これらのエピソードから浮かび上がるフョードルの姿は、それぞれが目を見張らせるようなドラマ性と意味とに満ちていることが明らかとなるであろう。我々は今回、それらのフョードル像を、まずは順次一つ一つ個別に立ち上がらせるように努めたい。この男の全体像を把握することが我々の将来の目標ではあるが、今はそれぞれのフョードル像が互いに矛盾し分裂しているように見えても、急いでそれらの間に統一を求めようとすることや、結論を急ぐことは避けたいと思う。個別像の検討と全体像の追及。的確なフョードル像を求めるにあたっての有効な方法としては、これら二つの間での往還を繰り返す他ないであろう。そもそも統一的で整然としたフョードル像を求めること自体が、作者の言う「何かある種独自の民族的桁外れ」たるフョードルとは容易に相容れぬことであり、作者とこの男の畏に嵌まり、彼らによって嘲笑的とされかねないであろう。それほどドストエフスキイが造型したフョードルとは、この作品における一級の、しかも捉え難い登場人物であり、遂には息子たちからその脳天を叩き割られつつも、カラマーゾフの世界に一人屹立し、独自の光芒を放つ存在なのである。

## A.ルカ福音書 (1)「主よ、今こそ」

### 二つの「駆け落ち」

食客フォードルの最初の結婚。この男が本来は高根の花でしかなかった富裕な地主の娘アデライダを獲得し、その持参金の大部分をせしめることができたのは、ひとえに彼女の内に流れるロマンチズムの血に訴え、彼が「駆け落ち」という伝家の宝刀に訴えたことによる。ところがその後今度はアデライダが、本家ロマンチズムの血を奪われてなるものかとばかりに、夫フォードルと三歳になる息子ドミートリイとを棄て、神学校出の零落した教師との「駆け落ち」という手段に訴え、ペテルスブルクに身を隠してしまうのだ。妻に逃げられた夫。この悲劇的かつ喜劇的立場に立たされたフォードルは、世間に対して道化としての自分を曝し続け、やがてアデライダ死去の報に接するや、往来に躍り出て、両手を天にかざし、悲しみとも歓喜ともつかぬ叫びを發するのである。この時彼が用いるのが、ルカ福音書冒頭のイエス生誕にまつわるエピソードから採られた、老預言者シメオンの叫びである。

「主よ、今こそ御言葉に従ひて僕を安らかに逝かしめ給ふなれ」(ルカ二 29)

### 歓喜と悲嘆の境

ルカ福音書の第一章と第二章が伝えるのは、洗礼者ヨハネと救世主イエス生誕の天上的喜びの様々なエピソードであり、人間に救済をもたらした神の愛と恩寵への讚美である。それらの中でフォードルが用いるのは、神による人間救済劇がいよいよ開始された祝宴感覚の中、待望のメシヤ生誕に接した老預言者シメオンが神に向かい發する叫びだ。この叫びの中にある複雑で味わい深い感情。待望の救世主によりやく出会えた歓喜と神への感謝、そしてとうとうその出会いを果たした老いた身に迫る死の受容と、この世の生からの解放。J.S.バッハはこの老預言者シメオンの心を生と死、深い喜びと悲しみの交錯する見事なカンタータとして表現している(Ich habe genug「我、満ちたれり」、1727、BWV82)。フォードルは妻の死により自らの生が一つの頂点を迎え、格好の「見せ場」到来と見るや、自分自身をこの老預言者シメオンに重ね、往来に飛び出し、歓喜とも悲しみともつかぬ絶妙な自虐的道化的叫びを發するのだ。

忘れてならないのは、この叫びに重ねて作者が報告するフォードルの現実の生である。それは妻が残した幼児ドミートリイを「忘れ去り棄て去り」、自らの住まいを快樂の「巢窟」<sup>ヴェルテップ</sup>と化した「好色漢」<sup>スラダストラスニク</sup>が日々送る、酒と女と金にまみれた破天荒な生の享樂の姿だ。ルカが記すイエス生誕と自らのこの世からの解放・別れとを交錯させた老預言者シメオンの叫びに対し、イエスの生誕ならぬ妻の死と自らの解放・喜びとを交錯させるフォードルの叫びとは、聖書の神聖劇を巧妙に換骨奪胎させた叫びであり、ここにあるのは生と死、聖と俗、歓喜と悲嘆との境界を定かとしな、否、恐らくはそれら両者を意図的に交錯・逆転させての異教的瀆神的道化芝居と言うべきものである。遠く洗礼者ヨハネと救世主イエス

生誕の天上的祝祭にまで遡り、そこに展開したドラマを素材に見事な道化芝居を打って人々を煙に巻き、密かに一人ほくそ笑むフォードル。その「だぶついた喉仏」と、「鋭く鉤状のローマ鼻」と、「肉感的で大きな唇」と、その間から垣間見える「黒い欠け歯」が鮮やかに浮かび上がるようである。

このエピソードを序曲とするかのように、フォードルはゾシマ長老との会見の場（「場違いな会合」）に乗り込み、長老を相手に旧約新約の知識を駆使し、次々と破廉恥な道化芝居を演じてゆく。『カラマーゾフの兄弟』第二篇「場違いな会合」とは、父フォードルと長男ドミートリイとの金と女とを巡る紛争の、ゾシマ長老による調停の場という第一の側面に加えて、否、それ以上に聖書を挟んでのゾシマ長老とフォードルとの、そして更にゾシマと次男イワンの熾烈な戦いが繰り広げられる場であることも忘れてはならないだろう。その他長男ドミートリイに対するゾシマの跪拝という驚くべき振る舞い。リーザとゾシマ長老との対話。「信仰心の篤い農婦たち」とゾシマとの対話。また「信仰心の薄い婦人」、つまりリーザの母ホフラコワ夫人とゾシマとの対話等々。これらもまた作品全体の構成上忘れてならない重みを持つエピソードである。（これらゾシマ長老と登場人物たちとの対決と、その構造については、『カラマーゾフの兄弟論』第I～V章を参照）。

## **B. 旧約詩篇「<sup>おろか</sup>愚なるものは、<sup>こころ</sup>心のうちに、<sup>かみ</sup>神なしといへり」**

### ディオドロと旧約聖書

ゾシマ長老の草庵に乗り込んだフォードル。彼が手始めに長老を相手に発する「場違いな」駄洒落、言葉遊びについては省略しよう。この駄洒落を名刺代わりのように差し出したフォードルは、その昔貴族の許に居候をし、食客として「ただ飯を喰らっていた」頃から自分が「道化」であり、「宗教的痴愚」のようなものであったと打ち明け、更に自分の身体の内には「けちな」「悪魔」が住み着いているのかも知れないと嘯いてみせる。悪魔への言及が呼んだ連想であろう、話題は次に信仰の揺れに移り、自分がディオドロと同類の者であるとする彼は、この無神論哲学者について「一口話」の披露に及ぶ。

「エカチェリーナ女帝の御代でございます。長老さま、哲学者のディオドロがプラトン主教を訪問した話をご存知でしょうか。入るなりディオドロは、いきなり「神なし」と言っただけだそうでございます。これに対し、偉大なる主教さまは指を一本立て、お答えになったのだそうでございます。《<sup>おろか</sup>愚なるものは、<sup>こころ</sup>心のうちに、<sup>かみ</sup>神なしといへり》。これを聞くやディオドロは主教さまの足元にひれ伏し、《信じます。洗礼も受けます》と叫び、その場で洗礼を受けたのだそうでございます」（二二）

### 地主貴族の偽善

ミウーソフの猛烈な怒りと抗議を前に、フォードルはこの話の最後の部分、ディドロの洗礼については自分のでっち上げであることを認める。だがフォードルによれば、ディドロの無信仰についての「一口話」自体、彼がここの地主たちの許に居候をしていた頃に繰り返し聞かされたものであり、その中にはミウーソフの伯母もいたとの暴露に及ぶ。地主たちが、ディドロの挑戦を即座に退けたプラトン主教の信仰を賞讃したのか、逆にこの啓蒙主義哲学者の無神論に心を寄せていたのか、必ずしも明らかではない。むしろフォードルは、地主貴族たちの「一口話」がその曖昧さの上に立つ軽薄なものであること、彼らの外面の信仰と内面の現実とが解離している偽善を暴露したと考えるのが真実に近いであろう。この土地きっての大地主ミウーソフの怒りも故なきものではなかったのだ。

### 「愚かなるもの」の射程

注目すべきはフォードルが言及した聖句、主教がディドロにぶつけた詩篇の一節である。「愚かなるものは、心のうちに、神なしといへり」。これは旧約の詩篇において繰り返される数多くの印象的な表現の中でも、極めて平明かつ特徴的なものの一つと言えるであろう。ユダヤ民族が追いやられた筆舌に尽くし難い長い苦難の歴史の中で、ひたすら神の助けと救いを待ち望み、その慈悲と憐みを求める民の叫びと祈りを歌い続けたのが詩篇作者である。(その真偽はともかく、全百五十篇の殆どがダビテ作とされる)。それらの叫びと祈りの中から、この表現が含まれる典型的な一篇を以下に挙げておこう。

「愚かなるものは、心のうちに、神なしといへり。かれらは腐れたり。かれらは憎むべき不義をおこなへり。善をおこなふ者なし。神は天より人の子をのぞみて、悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひしに、みな退きてことごとく汚れたり。善をなすものなし一人だになし。不義をおこなふ者は知覚なきか。かれらは物くふごとくわが民をくらひ、また神をよばふことをせざるなり。かれらは懼るべきことのなきときに大におそれたり。神はなんぢにむかひて營をつらぬるもの骨をちらしたまへばなり。神かれらを棄たまひしによりて汝かれらを辱かしめたり。願くはシオンよりイスラエルの救のいでんことを。神その民のとらはれたるを返したまふとき、ヤコブはよろこびイスラエルは樂しまん」(詩篇 53)

(『舊約新約聖書』、日本聖書協会、1967)

この第 53 篇以外にも、同様の趣旨の歌・表現は第 14 篇を始めとして、第 10・36・42・51・73・94・115 篇等々に少なくない。それらにおいて歌われるのは、まずは神エホバに叛き、ユダヤ民族に苦しみをもたらす強大な敵国・「愚かなるもの」への怒りと裁きと報復、即ち彼らの絶滅と滅亡、いわゆる「聖絶」を訴える熱烈な祈りである。更にそれらの歌はユダヤの民自身の内にも見出される「愚かなるもの」、つまり神の前に「腐れたる」もの、「汚れたる」もの、「不義をおこなふ」もの、「知覚なき」ものにまで対象を広げてゆく。つまりここに歌われる「愚かなるものは、心のうちに、神なしといへり」とは、ユダヤの様々な

敵からユダヤ民族自身をも含め、広く「<sup>ひと</sup>人の子」の魂が宿す「<sup>おろか</sup>愚」さ、その罪と傲慢と怠惰さや、反逆と不信の心を表現し、かつそれを弾劾し裁き去る言葉としての普遍性を帯び、紀元前の世界から遙か遠く時間空間を隔てて十八世紀のフランスから更に十九世紀ロシアへと及び、今や家畜追込町フォードルの道化の武器として用いられるに至ったのだ。フォードルの「一口話」、旧約聖書を用いた道化は、先のルカ福音書における救世主生誕の祝祭空間を更に遠く遡り、その歴史的奥行きと普遍性を拡大し、その内容も強力な毒性を帯びた批判性を持つものとなったと言えるであろう。

### フォードルの修業時代

さて旧約聖書とフォードルとの関係を考える時、もう一つ注意を忘れてはならない要素がある。彼とユダヤ人との関係である。後にも見るが筆者は、フォードルがアデライーダに次ぐ二度目の妻、つまりイワンとアリョーシャの母ソフィアとの出会いをしたのは、ある儲け仕事のことでユダヤ人と組んで他県に赴いた時であったと記す。更に彼はこの妻の死後三～四年してロシアの南部に赴き、最後にはオデッサに腰を据え、数年間を過ごしたことが記される。ロシア南部とはユダヤ人隔離政策によって、ロシアのユダヤ人たちの多くが移り住まわされた地域である。これらの地でフォードルは、最初は「種々雑多なジューたち」と、次にはそれらの中でも特権的な地位を持つ「ヘブライ人たち」とも付き合い、ひたすら金儲けの腕を磨いたことが仄めかされる。彼が家畜追込町に戻ったのは、アリョーシャが帰郷する三年ほど前のことでしかなかったのだ。アリョーシャの出家に至る魂の激しいドラマ、そしてイワンの「大審問官」と「地質学的変動」に至る長く厳しい思索の道程。これらモスクワで展開した兄弟二人の「神と不死」探究のドラマの向こうで、南部ロシアでもまたディアスポラのユダヤ人たちを師とする、父フォードル独自の「修業時代」が展開していたのである。

それがフォードルの金儲けの修業であったことはまず間違いないだろう。だが彼が家畜追込町にいる間に商売でユダヤ人と付き合い、またその後南部ロシアの様々なユダヤ人の間で暮らす間に、この人々が民族的苦患の中で遠いシオンの地にいますエホバ神を慕い、如何に熱烈な祈りを捧げ続ける民であるかを知るに至ったことは想像に難くない。またフォードルはこのユダヤ人たちが、自分たちを虐げ脅かす諸民族と、他ならぬ自分たち自身の内にも潜む不信の心に厳しい目を向け、その現実と認識を「<sup>おろか</sup>愚なるものは、<sup>こころ</sup>心のうちに、<sup>かみ</sup>神なしといへり」という詩句に煮詰めてエホバ神に訴え、その裁きを迫る姿と心情を身近で知り、かつそれを自分自身の現実と認識にも重ね、独自の人間への批判の眼・シニズムを育てていったと考えることも不可能ではない。

### 道化の根と標的、その奥行き

かくして詩篇を用いたフォードルの道化芝居とは、その背後に彼自身とユダヤ民族の長い歴史を宿すものとして立ち現れる可能性がある。つまりこの上ない好色漢かつ吝嗇漢か

つ飲んだくれの彼が、その一方で世間や自分自身に向けていたのは、ユダヤ人たちの間での「修業時代」に培った眼であり、「愚<sup>おろか</sup>なるもの」の内に潜む「神なし」の現実、信仰深い人間の内にさえ潜む不信、「腐<sup>くさ</sup>れたる」「汚<sup>けが</sup>れたる」「智<sup>きと</sup>覚なき」心、つまりはそのニヒリズムと偽善を見抜く鋭利で辛辣な眼差しであった可能性が浮かび上がるのだ。作者ドストエフスキイは、かくの如きニヒリズムとシニシズムとを抱えたフョードルをゾシマ長老の前に立たせ、詩篇を用いた瀆神的道化芝居を以って、ミウソフを始めとするロシアの地主貴族たち、そしてゾシマ長老の属する修道院を相手に、彼らが宿す偽善と欺瞞に毒の礫を投げさせたとも考えられるのである。新約から旧約へ。フョードルの道化芝居が地下に張る根は遠く深く、そしてその毒性は強い。

### **C.ルカ福音書 (2)「幸福なるかな、<sup>さいほひ</sup>汝<sup>なんぢ</sup>を宿<sup>やど</sup>せし胎<sup>たい</sup>」**

#### ガリラヤの一女性に託して

さて生誕から遙か時が経って成長したイエスが、ガリラヤ各地で弟子たちと共に「神の国」の宣教に打ち込んでいた頃のことである。ルカ福音書は群衆の中の一女性が感極まって、イエスに向かい次のような歓声を上げたと記す。

「幸福<sup>さいほひ</sup>なるかな、<sup>なんぢ</sup>汝<sup>やど</sup>を宿<sup>たい</sup>せし胎、<sup>なんぢ</sup>なんぢの<sup>す</sup>哺<sup>ちぶ</sup>ひし<sup>ちぶ</sup>乳房<sup>き</sup>は」(ルカ十一 27)

フョードルはこれを驚くべき表現に変え、ゾシマ長老にぶつける。

「幸福<sup>さいほひ</sup>なるかな、<sup>なんぢ</sup>汝<sup>やど</sup>を宿<sup>たい</sup>せし胎、<sup>なんぢ</sup>なんぢの<sup>す</sup>哺<sup>ちぶ</sup>ひし、<sup>ちぶ</sup>乳房<sup>き</sup>は。殊<sup>こと</sup>に<sup>ちぶ</sup>乳房<sup>き</sup>こそ！」(二 2)

先のイエス生誕に際して老預言者シメオンが上げた歓喜の叫びに続き、フョードルがここで焦点を合わせるのはガリラヤの一女性のイエスに対する感動であり、その母マリアに対する讃美の叫びである。注目すべきはこの女性が発した叫びが、先の老預言者シメオンの叫び(二 29~32)に先立ちルカが報告する、聖母マリアによるヨハネの母エリサベト訪問の場面と呼応するという事実である。つまりその胎の内にイエスを宿すマリアの挨拶を聞いた時、エリサベトの内で胎児ヨハネが飛び跳ね、聖霊に満たされたエリサベトは、マリアに向かって次のように大声で叫んだとされるのだ。

「おんなの中<sup>うち</sup>にて<sup>なんぢ</sup>汝<sup>しゅくふく</sup>は祝福せられ、その胎<sup>たい</sup>の<sup>み</sup>實<sup>しゅくふく</sup>もまた祝福せられたり。わが主<sup>しゅ</sup>の母<sup>はは</sup>われに<sup>きた</sup>来る。われ何<sup>なに</sup>によりてか<sup>これ</sup>之<sup>え</sup>を得<sup>み</sup>し。視<sup>み</sup>よ、なんぢ<sup>あいきつ</sup>の<sup>こゑ</sup>挨拶<sup>こゑ</sup>の聲、わが<sup>みみ</sup>耳<sup>い</sup>に入るや、我<sup>わ</sup>が<sup>こ</sup>兒<sup>たいない</sup>、胎<sup>よるこ</sup>内<sup>しん</sup>にて<sup>もの</sup>喜<sup>さいほひ</sup>びを<sup>たま</sup>どれり。信<sup>しん</sup>ぜし者<sup>もの</sup>は幸福<sup>さいほひ</sup>なるかな、主<sup>しゅ</sup>の語<sup>かた</sup>り<sup>たま</sup>給<sup>かなら</sup>ふことは必ず<sup>じやうじゆ</sup>成就<sup>じやうじゆ</sup>すべければなり」(ルカ一 42-45)



### 「幸福なるかな」(μακαρια)

共に用いられた「幸福なるかな」(μακαρια)。フォードルはここで、自らをガリラヤの一女性とヨハネの母エリサベトに重ね、マリアとイエス聖母子への讃美の叫び「幸福なるかな」を、ゾシマ長老にぶつけてみせたと考えてよいであろう。しかもここでフォードルは、聖母マリアの受胎と出産、そして育児・哺乳を意図的に前面に押し出し、大胆にも聖母マリアの「胎」への言及に加え、更に句読点までつけ加え、重ねて「乳房」を強調する。聖母マリアさえもが地上的・肉的・性的な存在として讃美の対象とされると共に、道化の道具ともされ、ゾシマ長老にぶつけられるのだ。「場違いな会合」を舞台とする「好色漢」フォードルの面目躍如たる瀆神的道化芝居、「聖」と「俗」の境界を打ち破る恐るべき「一線の踏み越え」である。作者は当のゾシマ長老を始めとして、その場に居合わせた人々が如何なる反応をしたか報告をしない。そこにあったのは、ただの笑いであろうか。

### 天上的祝祭劇とスキャンダル

さてここで我々はフォードルの聖書に向ける目が、聖母マリアの「胎」や「乳房」に向かうだけの「好色漢」としての目であるとして眉を顰めるだけでは、この存在の十全な理解には至り得ないであろう。ルカ福音書の冒頭二章で報告される洗礼者ヨハネと救世主イエス誕生の天上的祝祭の物語とは、改めてヨハネの母エリサベトとイエスの母マリアに焦点を合わせる時、実は前者は右女の老女の懐胎、後者はうら若き処女の懐胎というこの上なくスキャンダラスな奇跡物語の相も持つのだ。また彼女たちの夫に目を向けても、前者はザカリアという年老いた祭司、後者はヨセフというその生と死の詳細も定かではない大工である。更にまたシメオンは老預言者、シメオンに続き神殿でイエス生誕への讃美を唱えるアンナも八十四歳の老預言者である。紀元以降二千年にわたる人類救済史の中核をなしてきたキリスト教の出発点に存在したのは、ルカによれば、これら右女の老女と老いた祭司とからの洗礼者ヨハネの誕生、また未婚のうら若き処女とガリラヤの一大工とからの救世主イエスの誕生、そしてこれらの奇跡を神殿でひたすら待ち続けた老預言者たちという、人間の生と死とそして性に関する常識を大きく覆す奇跡的事件だったのである。

ルカ福音書を介し、「好色漢」フォードルの瀆神的道化芝居が焦点を絞り込んだのは、このような不思議と謎を孕む洗礼者と救世主の生誕物語であり、かくして彼の道化芝居とは単に聖書を舞台とした人の度肝を抜く好色的瀆神的テーマの提示としてあるばかりではなく、人間の生と死と性についての常識と埒を大きく打ち破る驚きと神秘、そして豊饒と祝祭の原初的生命感を帯びた磁場であるとさえ言えるであろう。フォードルが如何にして聖書のこのような部分に目を注ぐことになったのか、その理由を単に「好色漢」としての彼に求めることは、その道化芝居が持つ意味の奥行きを大きく見失ってしまう危険性がある。「何かある種独自の民族的桁外れ」。フォードルが新約と旧訳に注ぐ目には、只ならぬものがあると考えべきである。

## カラマーズフとスキヤンダル

ここから改めて『カラマーズフの兄弟』を振り返る時、そこに広がるのは正にフォードルが新約と旧訳に注ぐ視線の延長線上にある世界に他ならない。スメルジャコフの誕生を巡る、好色漢フォードルと宗教的痴愚たる乞食女スメルジャシチャヤとの、誰も決して真実を掴み切れない謎と醜聞。それに先立つ下男グレゴリーとマリア夫妻を巡る、六つ指の赤ん坊「<sup>ドラゴン</sup>竜」の誕生と死という痛切な悲劇。更にその六つ指の子が死んだ夜、臨月の腹を抱えたスメルジャシチャヤがフォードル邸の高塀を攀じ登って風呂場に辿り着き、自らの命と引き換えに産み落としたスメルジャコフを、「神様からの贈り物」として自らに引き受けるグレゴリーとマリア夫婦の胸を打つエピソード。これらフォードルを中心に次々と巻き起こされる怪奇で戦慄的な醜聞、生と死と性にまつわる「桁外れ」な物語は全て、ルカ福音書が伝える聖にして異様にしてまた豊饒さに満ちた奇跡的生誕物語と呼応し、我々読者をカラマーズフ世界がその奥底に帯びる戦慄的電荷、神秘の淵に呼び込むものである。

グレゴリーは自らの投げ込まれた悲劇を「自然界の混乱」と呼び、これを機に彼の内部では「神さまのこと」が開始されたと作者は記す。つまりこの下男は、自らが捲き込まれた「自然界の混乱」を機に『ヨブ記』や『殉教者列伝』や、殊に『シリアの聖イサクの苦行説教集』などの聖なる書物を、殆ど何も理解出来ぬままに何年間にもわたり読み耽ったのである。「自然界の混乱」が呼び起こす「神さまのこと」。グレゴリーが表現するものとは、フォードルがカラマーズフ世界にまき散らす醜聞・混乱を根底から受け止め、そして支える信の逆説であり、作者ドストエフスキイが『カラマーズフの兄弟』の根底に置いたロシア民衆の信の堅固さと奥深さを代表し象徴するものと言えるであろう。

道化フォードルが凝視する聖書世界、また彼がその瀆神的道化芝居によって次々と引き起こす醜聞・混乱の世界とは、我々人間の常識的思考の枠を大きく転覆させる「自然界の混乱」が産み出される現場であると同時に、人間の生と死と性に関する豊饒さが現われ出る逆説的磁場であり、「神さまのこと」が人間の心に降り立つ場でもあるという視野を、我々はここに一つ確保しておこう。

## **D.ルカ福音書 (3) 「われ永遠の生命を嗣ぐためには」**

### 対決

フォードルからゾシマに向かい、新たな問いが発せられる。

「師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何をなすべきか」(ルカ十 25)

先の老預言者シメオンと聖母マリアから、焦点は大きく移動する。ここでフォードルは「師よ」と呼びかけることで、今や聖者ゾシマを正面からイエスと重ねるのだ。この道化

が新たにぶつけるのは、その後に行われる長老とホフラコワ夫人との面会で夫人が発するのと同じ問いである。つまり「神」の存在を巡る問いと共に、この作品において主人公たちが常に発し続ける中核的な問い、死を超えた「永遠の生命」を巡る問いである。これは単なる道化的問いというよりは、修道院でひたすら「神と不死」を求め、「キリストの御姿」を守り続けてきたゾシマ長老に投げつけられた正面きっての挑戦であり、「場違いな会合」における最初の、しかも決定的な対決の火蓋がここに切って落とされたと考えるべきであろう。

### 「ロシアの小僧っ子」の問い

前回の「研究会便り(1)」でも扱ったが（「アリョーシャとイワンの聖書—モスクワ時代、イエス像構成の一断面—」の「はじめに」、また『カラマーゾフの兄弟論』の冒頭も参照）、フォードルがゾシマ長老に投げつける問いが、この作品を縦に貫く最も重要な問いの一つであることを、ここで再度確認しておこう。イワンとアリョーシャが故郷の料亭「みやこ」で初めて正面から向き合う場面、ここでイワンが発する言葉は『カラマーゾフの兄弟』の中心テーマをストレートに言い表すものとして、またドストエフスキイ文学を縦に貫く骨格を明らかにする言表として、いくら注意してもし過ぎることはないであろう。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。[中略] そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるかとか、不死は存在するかとかいう世界的な問題なのだ」（五三「肯定と否定」）

「神と不死」はありやなしや。『カラマーゾフの兄弟』全篇を通して、登場人物たちそれぞれが繰り返し問い続ける、これら二つの「世界的な」「永遠の」喫緊の問い。中でも第二篇の「場違いな会合」において、フォードルとホフラコワ夫人が期せずして共に発する「不死」、即ち死を超えた「永遠の生命」を巡る問いは、具体的に新約聖書の中に典拠を求めると、ルカ福音書第十章の「善きサマリヤ人」の譬えにおいて、イエスが示す「隣人愛」の教えの導入部に置かれた問いである。この前後の文脈を確認しておこう。

イエスを試みようとする「或る<sup>あ</sup> 教師<sup>けうほふし</sup>（律法学者）」が問いをぶつけてくる。「師よ、われ永遠の生命を嗣ぐためには何<sup>なに</sup>をなすべきか」（ルカ十 25）。律法学者に対して、イエスは問い返す。律法には何と書かれているか、質問者自身はどう読んでいるか。すると律法学者は〔旧約〕聖書の聖句を以ってこう答える。

「なんぢ<sup>こころ</sup> 心<sup>つく</sup>を盡し、精神<sup>せいしん</sup>を盡し、力<sup>ちから</sup>を盡し、思<sup>おもひ</sup>を盡して、主<sup>しゅ</sup>たる<sup>なんぢ</sup> 汝<sup>かみ</sup>の神<sup>あい</sup>を愛すべし。また己<sup>おのれ</sup>のごとく<sup>なんぢ</sup> 汝<sup>となり</sup>の隣<sup>あい</sup>を愛すべし」（ルカ十 27//申命記六 5、レビ記十九 18）

神への愛と隣人への愛。この男の律法に関する模範的な解釈を受けて、イエスは言う。「な

んちの<sup>こた</sup>答えは<sup>ただ</sup>正し、<sup>これ</sup>之<sup>おこな</sup>を行へ、さらば<sup>い</sup>生くべし。しかし「おのれを<sup>ぎ</sup>義とせん」と欲する律法学者は、頭の中に律法の教えを正しく納めてはいるものの、具体的な隣人のことが思い浮かばない。そこで彼は問い返す。「わが<sup>となり</sup>隣とは<sup>だれ</sup>誰なるか」。この問いに対し、イエスの口から語り出されるのが「善きサマリヤ人」の譬えである（同 30-37）。

### 長老の裁き

ゾシマ長老の前に次々と様々な人物が立ち現われ、その心の内を曝け出す「場違いな会合」。ここで「永遠の生命」に関する問いを投げつけるフォードルとホフラコワ夫人。イエスに向き合った真面目な律法学者とは違い、これら二人が日々送るのは「神と不死」の探求からは程遠い世俗の塵にまみれた生活と言う外ない。だがこれら二人の内にも「永遠の生命」に関する問いはなお消えず脈打ち、たとえその問いが現われ出るのは世間話や道化芝居の形でしかなくとも、彼らもまたアリョーシャやイワンと同じ「ロシアの小僧っ子」なのであり、ドストエフスキイはその二人をゾシマ長老の前に立たせるのだ。

注目すべきは、これを受けたゾシマの応答である。今までフォードルの聖書を用いた道化芝居を前にしていたゾシマは、たとえそれらが如何に意表を突いた聖書への切り口を示すものであったとしても、またそれらが世や修道院に対する如何に毒に満ちた批判の力を宿すものであったとしても、既にその背後にあるこの男の本質、その「<sup>おろか</sup>愚なるもの」の在り方を見抜いていたのであろう。新たな問いの聖書的出所も熟知する長老が返すのは、律法学者に対するイエスの応答に劣らず厳しい応答であり、それは続くホフラコワ夫人に対してと同じく、「自分自身に対して嘘をつかぬこと」という警告である。

「大切なことは、自分自身に対して嘘をつかぬことです。自分自身に対して嘘をつき、自分自身の嘘に耳を傾ける者は、果てに自分の内においても周りにおいても、何ら真実というものが見分けられなくなり、そして恐らくは自分に対しても他人に対しても、尊敬を抱けなくなる迄に至ってしまうのです。誰に対しても尊敬を抱けなくなって、愛することも止めてしまい、愛も持たずに、自分を楽しませ気を紛らわせようとして、情欲や卑猥な快樂に溺れ、遂には畜生も同然の所業に走るようになるのですが、それも全ては、他人に対して自分に対して、嘘をつき続けることから出ているのです」（二 2）

### 存在の嘘、フォードルとホフラコワ夫人

フォードルから吐きだされる言葉の一つ一つ、それが如何に人の意表を衝き、如何に日頃の常識の枠を覆す力を持つものであろうとも、「真実」に根を置くことのない「嘘」であること、またその生が「愛」、つまり「隣人愛」「実行的な愛」の實踐から遠いばかりか、彼の存在そのものが道化的虚偽としてあり、ただ「情欲や卑猥な快樂」の追求に向かい、結局は「畜生」への道に繋がるものでしかないことをゾシマは見取ったのだ。

長老の前に相次いで立つフォードルとホフラコワ夫人。この親たちの存在の奥深くに根を張った「嘘」、そしてシニシズムとニヒリズム。その虚偽が見抜かれ、死にゆく長老から直截かつ厳しい警告、否、最後の裁きの判決が言い渡されたのである。長老は、フォードルもホフラコワ夫人も共に「心を盡」さず、「精神を盡」さず、「力を盡」さず、「思を盡」さずして、「主たる汝の神を愛」さず、また「己のごとく汝の隣を愛」さぬこと、つまり自らの存在そのものを虚偽の内に沈めさせていること、結局は「愚なるものは、心のうちに、神なしといへり」と詩篇作者が断じる存在に他ならないとの決定的な裁きを下したのだ。フォードルを裁き去るゾシマ長老。この厳しい視線も、フォードル像の構成においては一つ忘れてならないものであろう。

フォードルの反撃が始まるのは、正にここからである。

## Ⅴ. ヨハネ福音書「汝らは己が父悪魔より出でて」

### 「嘘の子」、フォードルの反撃

存在が宿す「嘘」。ゾシマ長老の裁きと警告に対し、直ちにフォードルは言い返す。その慇懃な態度から洩れ出るのは、ゾシマ長老に対する正面切つての反撃の意志である。彼が拠って立つのは、今度はヨハネ福音書だ。自分は生涯にわたり毎時毎瞬「嘘」をつき続けてきた。「まことに嘘は嘘の父なり」であり、自分は「嘘の子」であつても構いはしない。ゾシマ長老の裁きと警告を、彼は聖書を典拠に正面から受けて立ったのだ。ルカからヨハネへと聖書を自在に使いこなし、あるいは都合よく利用しての、一筋縄ではいかぬ見事と言うべき道化的切り返し、居直りと言うよりは逆襲である。彼が新たに典拠とするヨハネ福音書第八章、そこでイエスが「ユダヤ人たち」に対してぶつける痛烈な批判を見ておかねばならない。この聖書テキストをフォードルが如何に自分流に読みこなし、それを自家薬籠中の物としているかが明らかとなろう。

「汝らは己が父悪魔より出でて、己が父の愆を行はんことを望む。彼は最初より人殺なり、また眞その中になき故に眞に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり」(ヨハネ八 44)

「汝らは己が父悪魔より出でて」。ヨハネ福音書は、ユダヤ人たちをイエスの敵として正面から打ち出す。ヨハネのイエスは敵対するユダヤ人たち、自分を十字架上の死に追いやるろうとするユダヤ人たちを、「己が父悪魔より出でて」と断じ、いわば「悪魔の子」として痛烈この上ない裁きと批判をぶつけるイエスである。フォードルはこのイエスのユダヤ人批判にアイロニカルな自己認識を重ね合わせ、自分自身を「嘘の子」「虚偽者」としてゾシマの前で居直つたのだ。つまりフォードルは、敢えて自らの出自を「天なる父」とは対極

のもう一人の父「己が父悪魔」であるとし、自分はその血を受け継ぐ「悪魔の子」であり、「真<sup>まこと</sup>その中<sup>なか</sup>になき」「嘘の子」であるとして人々の笑いを誘い、破廉恥かつ露骨な居直りを決め込むことで、ゾシマ長老への逆襲を試みたのである。

### 「悪魔の子」、ユダヤ人と重ねて

先に確認したように作者はフォードルが、二番目の妻ソフィアとの出会いの時点から既にユダヤ人と組んで仕事をしていたと記し、更にソフィアの死後はロシア南部に赴き、その後オデッサに住み着き、ユダヤ人社会に出入りして金儲けの才覚を磨いていたと報告する。フォードルは敢えてこのディアスポラのユダヤ人たちの社会に入り込み、彼らの下で相当期間の「修業時代」を送ったのだ。イエスから「悪魔より出でて」と弾劾されるユダヤ人、その後祖国を失い世界中に離散し、筆舌に尽くし難い辛苦を味わわされ続けてきたユダヤ人に自らを重ね、敢えて自らを「嘘の子」と呼んでゾシマに向かうフォードルの道化芝居の背後には、自己嘲笑の道化性と共に、いやそれ以上に自身の体験から来る人間社会とキリスト教に対する、そしてその裏に潜む偽善性と暴力性に対する鋭利な洞察と暗い叛逆の心が潜んでいると考えるもおかしくはない。先に見た「愚<sup>おろか</sup>なるものは、心<sup>こころ</sup>のうちに、神<sup>かみ</sup>なしといへり」。この旧約詩篇の利用が、ユダヤ民族の敵もユダヤ人自身も含め、およそ人間全てが内に持つ「愚かさ」を標的とした自虐的道化芝居であったとすれば、この「己が父悪魔より出でて」を用いた道化とは、自らを「嘘の子」として「悪魔の子」ユダヤ人と重ねる居直りであり、世と修道院とゾシマ長老に対する正面からの逆襲と挑戦とも言えるであろう。聖書語句を存在の深みにまで組み込み、それを自分自身をも含めた世に対する、そして修道院の聖者ゾシマに対する巧緻と毒に満ちた逆襲と挑戦と嘲笑の武器として用いるフォードル。恐るべき瀆神的道化の姿がここにある。

### 悪魔の系譜

「毒蛇<sup>ガート</sup>」。これはイワンが、フォードルとドミートリイ親子の戦いを指す際に用いた言葉だ。「二匹の毒蛇が互いを喰い合っている」。この「毒蛇」は鋭利な牙で狙った相手に噛みつき、その牙から密かに聖書より吸い取った毒を注入し、その毒がどこまで相手の心に沁み込むかをじっと伺う。この男をただの卑猥で吝嗇で破廉恥な道化芝居の演者と見做すならば、彼はその相手を聖書についての無知と偽善、人間心理についての皮相な理解ゆえに嘲笑し、最早興味を失ってしまうであろう。聖書を素材に自らを嘲笑させ、逆に相手を嘲笑し去る。道化フォードルにとって聖書とは、それへの反応によって人間の真偽深浅を見極める試験紙であり、その点でイエスと「キリストの愛」を追い求めて聖書と真摯直截に向き合うアリョーシャとイワン、これら「ロシアの小僧っ子」たちの正に裏返しの父がフォードルであると言えよう。

そのフォードルが乗り込んだのは「己が父悪魔」にとり敵の総本山たる修道院であり、しかもそこで聖者として崇められるゾシマ長老の草庵である。この聖者と正面から対峙し

て演じられる道化芝居。「己おのが父ちち悪魔あくまより出いでて、己おのが父ちちの慾よくを行おこなはんことを望のぞむ」。視野を広げれば、ここにあるのは間もなく開始されるゾシマ長老と、フォードルを「己おのが父ちち」とするイワンとの対決の前哨戦と言うべきものである。悪魔からフォードルを経てイワンへ、そしてイワンからスメルジャコフへ。『カラマーゾフの兄弟』における「聖なるもの」否定の系譜、悪魔の系譜が浮かび上がってくる。だがこの問題に関しては以下の F と G において、フォードルが長老の草庵でなお繰り広げる道化芝居を最後まで見届けた上で、改めて考えることにしよう。

## **Ⅱ. ルカ福音書 (4) 「この女おんなの多くおほくの罪つみは赦ゆるされたり」**

### ドミートリイの登場

さてスメルジャコフを除き、カラマーゾフ家の全員がゾシマ長老の草庵に集結する「場違いな会合」。今まで見てきたようにこの集まりは、ゾシマ長老が「道化爺」フォードルとの対決を「自分自身に対して嘘をつかぬこと」との厳しい警告を以って切り上げ、次いで「信仰心の篤い農婦たち」を慰め、更に「信仰心の薄い婦人」ホフラコワとの対話に続き、この会合のハイライトたるイワンとの対決を終えるや、いよいよ終章に向かう（ゾシマ長老とイワンとの対決については、『カラマーゾフの兄弟論』第V章 5 を参照）。ここで長兄のドミートリイが登場し、グルーシェニカを巡って父と子との間には案の定、狂乱の一幕が演じられる。「どうしてこんな人間が生きているのだ!」。怒りに我を忘れたかのように低く呻いたドミートリイは、フォードルを指さしつつ一同に問う。「いや、教えて下さい、果たしてこんな男が、なお大地を汚すことが許されるのでしょうか?」。運命的な言葉が発されたのである。

### 「牝犬」と「罪の女」

「お聞きになりましたか、お坊さん方、父親殺しの言うことをお聞きになりましたか?」。今や息子との「決闘」さえ口走るフォードルが新たに絞る道化的焦点は、嵐の目であるグルーシェニカだ。彼はミウソフから「牝犬」と呼ばれた彼女を弁護し、「立派な牝犬」とさえ呼んでみせる。「恥を知りなさい!」。イオシフ神父が、続いてカルガーノフが厳しくたしなめるや、待っていましたとばかりにフォードルは、居合わせた全員を向こうにまたも聖書を盾に大見得を切って見せるのである。ここで彼が新たな道化芝居の道具として用いるのは今度もルカ福音書であり、その第七章に記された「罪の女」のエピソードだ。『罪と罰』においてマルメラードフが、自らの追いやった売春婦の娘ソーニャを指して用いるエピソードである（ルカ七 36-50）。

ルカによると、カペナウムを根拠地としてガリラヤでの活動を続けるイエスが、ある町のパリサイ人の家に招かれ、食事の席についていた時のことである。その地で「罪ある一人ひとりの女おんな」（罪の女、売春婦）が、「香油にほひあぶらの入りたる石膏いの壺せきかう」を携えてきて、「泣きつつ御足つぽ

ちか うしろ た ち なみだ みあし かしら け ぬぐ みあし くちつけ  
 近く 後に立ち、涙にて御足をうるほし、頭の髪にてこれを拭ひ、また御足に接吻して  
 にほひあぶら ぬ  
 香油を抹れり」。この女の行為に対するパリサイ人の思いや、それを知ったイエスがシモン  
 に向かって語る譬え話は省略しよう。この罪の女のエピソードの頂点は、激しく熱い感情  
 を迸り出す彼女の振る舞いと、これを受けたイエスの次の言葉にあると言えよう。

「この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり」(七 47)。

フォードルはこのイエスの言葉を踏まえ、イオシフ神父に食って掛かったのである。だがイオシフの向こうに、そしてドミートリイの向こうに彼が狙いを定めるのは、ゾシマ長老と考えるべきであろう。二人の対決はまだ終わってはいないのだ。

「何が恥ずべきですか！あの《牝犬》は、あの《いかがわしい行いの女》はですな、ひょっとしてあなた方ご自身より、つまり行ない澄ましたお坊さま方よりもずっと神聖かもしれませんぞ！ことによるとあの女も、若い頃環境に蝕まれ身を持ち崩したのかもしれませんが。しかし《その愛すること大なればなり》なのです。《その愛すること大なればなり》の女を、キリスト様もお赦しになったのです」(二 6)

「その愛すること大なればなり」。イオシフ神父はこの言葉の意味を卑猥にとるべきでないとしたしなめる。だがまたもフォードルは、待っていましたとばかりに言い返す。

「いいえ、[彼女の罪が赦されたのは] そういう、正にあのような、お坊様、あのような[愛の] ためなのですよ！」(二 6)

聖母マリアの「胎」と「乳房」から更に進んで、好色漢フォードルがここで用いる武器は「多く愛した」「罪の女」の「あのような」「愛」である。福音書を自家薬籠中の物とするまでに読み込んだ「悪魔の子」にして初めて可能な「恥知らずな」、しかも舌を巻かされる鮮やかな切り返しだ。

### 「赦し」、ゾシマの跪拝

「永遠の生命」を巡る問いから始まった道化フォードルと聖者ゾシマとの対決劇は、ドミートリイの登場による狂乱の一幕を経て、ルカ福音書が伝える「罪の女」を用いての新たな道化芝居にまで進んできた。そしてこの対決劇の最後にゾシマ長老がとった行動は、人々を心の底から震駭させるものであった。長老は突然ドミートリイに向かって歩み寄り、その足元に跪くや、頭を床に着くまで深々と下げ、弱々しい微笑みを浮かべながら、一座に向かい四方に会釈をして、次のような言葉を発したのである。



「赦してあげなさい！全てを赦してあげなさい！」（二 6）

この言葉は『カラマーゾフの兄弟』において、いくら注目してもし過ぎることはないものであろう。何よりもまずこれはドミートリイに向かって発せられた、彼の父親フォードルへの赦しの勧告であり、更には彼の未来の苦難に向かって捧げられた祈りだと考えることができよう。ゾシマ自身、翌日アリョーシャにこう語るのだ。「私は昨日、あの人の未来の大きな苦しみの前に頭を下げたのだ」。だがこれはドミートリイに向かってばかりか、ドミートリイと争うフォードルに、またその場に居合わせた全員に、更には万人万物一切に向かって発せられた、ゾシマ最後の赦しの勧告であり祈りであると考えべきであろう。

このことは、「赦し」という言葉に焦点を絞ることで明らかになる。フォードルが「罪の女」とその「赦し」について語り出す直前、ドミートリイもまた皆の前で「赦し」という言葉を口にしていただ。つまり彼は婚約者カチェリーナとの帰郷に当たり、父親との和解を胸に期し、更には父親の老後の世話さえ考えていたと語っているのである。「僕は、父が手を差し伸べて赦しを乞うてくるならば赦し、自らも赦しを乞うつもりだったのです」。

アデライーダの遺産とグルーシェニカを巡り、骨肉相食む争いを繰り広げるフォードルとドミートリイ父子。この二人が期せずして、相次いで発した「赦し」という言葉。それぞれの意図した意味も向かう方向も全く異なる「赦し」である。だがこれを受けてゾシマ長老は、ここまで憎み合うことになってしまった父と子二人に対し、何よりもまず「赦し」の心に立つよう訴えたのだ。実の息子との「決闘」を口にするフォードルに対しては言うまでもなく、殊に父親殺しの瀬戸際にまで追い詰められたドミートリイ、帰郷前父親への真実の「赦し」の心に触れていたこの長兄に対して、彼が再び「赦し」の心に立ち帰るよう、長老は床に身を投げ出して訴えたと考えるのが自然であろう。

だがこの「赦し」については、『カラマーゾフの兄弟』の更に大きな文脈の中でも確認しておく必要があるだろう。と言うのも「赦し」とは、何よりもまずゾシマ長老の心の最深奥、その思想の再中核に置かれた言葉と言うべきものであるからだ。このことは同じ「場違いな会合」においてこの直前、恐らくは老いた夫を殺した罪に苦しむ「信仰心の篤い農婦」に対し、ゾシマ長老が語り聞かせる次の言葉から明らかとなるであろう。

「心から悔いている者に対し、神様が赦さぬ罪などこの地上にはありません」（二 3）。

神を愛として捕らえ、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上の死に至るまで貫いたイエス・キリストを正面から受け止め、修道院で沈黙と禁欲と祈りの内にその「キリストの御姿」を守り続けてきたのがゾシマ長老である。人間のあらゆる罪を超える神とキリストの愛と赦しというゾシマの確信・思想は、シリアの聖イサクの思想とも響き合い、『カラマーゾフの兄弟』全篇を縦に貫く根本思想と言うべきものである。イワンが「大審問官」の劇詩を語り出すのもまた、この地上に満ちる人間の苦難、罪なき幼な子たちの涙

の現実を向こうに置いて、「この世界中で赦すということができるような、赦す権利を持っているような存在は果たしてあるのか？」という彼の問いを受けて、アリョーシャがイエス・キリストの存在を提示したことを契機としてのことであることも思い出すべきであろう。

父への「赦し」の心を表白したドミートリイと、「罪の女」への「赦し」を新たな道化芝居の道具としたフォードル。これら二人を前にして発された、「赦してあげなさい！全てを赦してあげなさい！」。先に記したように、これは草庵に居合わせた全員に向かって発された愛と赦しの勧告であり祈りであると共に、地上の万人万物一切が抱える問題と苦悩に対してゾシマ長老が与える究極の「解答」であり、死にゆくゾシマの「遺訓」であり、そして神への「祈り」だと考えて初めて、その意味の奥行きと重みとを明らかにするであろう。(この作品の中心テーマである「赦し」については、更に『カラマーゾフの兄弟論』第Ⅶ章 A3 と D5、アリョーシャとグルーシェニカの宗教体験を貫く「赦し」のテーマも参照)

さてゾシマ長老が床に身を投げ出して跪拝し、消えゆく最後の命を振り絞って発した、万人万物一切に対する「赦し」の訴えと祈り。これが一座の人々に与えた衝撃の強さを描くドストエフスキイの筆にも改めて注意すべきであろう。「おお、神よ！」と叫ぶや、ドミートリイは両手で顔を覆い部屋から飛び出し、驚愕に駆られた他の客人たちもまた、フォードルも含め暇乞いも挨拶も忘れ、続いて部屋から群がり出て行ってしまふ。人々の心は震撼させられ、完全にその許容量を超えてしまったのだ。

一座を捕らえた戦慄感とその反応。これもまたフォードルの瀆神的道化芝居が呼び起こした逆説的スキャンダルであり、彼の「罪の女」とその「赦し」についての言及が、息子ドミートリイの言葉と相俟って、ゾシマ長老の心の最中核を直撃して呼び起こした振る舞いと言葉であり、その聖なる戦慄感であるとも言えよう。二人の対決は「赦し」という言葉を介し、ここにまで至ったのだ。

### イエスを巡る女性たち

さてフォードルの道化芝居が指し示すもう一つの側面もここで検討しておこう。イエス生誕に当たって老預言者シメオンが発した叫びと、その向こうにいる二人の母エリサベトとマリア。またイエスに向かい、ガリラヤの一女性が上げた叫びと、その向こうにいる母マリア。そして涙と共にイエスに塗油をした罪の女。これらからは、フォードルの聖書的道化芝居を特徴づける女性たちの存在が、やはり色濃く浮かび上がってくると言うべきであろう。だが先にも記したように、フォードルが彼女たちに向ける飽くことなき好奇の目にもみ焦点を当て、この男はやはり稀代の「好色漢」なのだと結論づけても、フォードルの道化の本質を見誤り、貧困なフォードル像しかもたらされず、間違いなく彼から激しい嘲笑を浴びせられて終わるのは目に見えている。

だが少なくともこうは言えるであろう。フォードルとは、イエスという存在を前にした女性たちとそのドラマを、ただ単に「聖なる書物」の伝える「聖なる物語」という固定し

た枠の内に捉えることは念頭になく、彼女たちをその内に生きた熱い血が流れる一人ひとりの人間、それぞれが具体的な個性を持つ一人ひとりの女性として捉えていた人物なのだ。またこうも言えるであろう。フォードルとは、聖書に登場する女性たちが如何なる人間的感情を持って生き、殊にイエスという稀有な存在を前にして如何なる感情に捕えられ、かつイエスとの間に如何なる血の通った関係を持った人たちなのか、独自の嗅覚を最大限に発動させて捉えようとしていた人物なのだ。ひたすらイエスと「キリストの愛」に焦点を絞り、そこから「神と不死」の問題に真摯かつ直截に肉薄してゆく息子のアリョーシャやイワンとは別に、この父親フォードルもまた「聖なるもの」に対するこの上ない鋭敏で独自の感性を内に宿し、かつ強く幅広い好奇心を働かせる人間だったのである。この感性と好奇心の上に立ち、聖書の伝える神とイエス・キリストと向き合い、更には聖母マリアと、イエスを慕う女性たちと、そして救世主を待ち望む人々たちにも焦点を絞っていた点で、フォードルが聖書に向かう姿勢自体は、実は極めて正統的なものであったとさえ言えるであろう。「桁外れ」の個性と生命力によって、またゾシマ長老が見抜いた存在の「嘘」によって、彼の目に映し出される聖書世界は極めて屈折し歪んだものとなっていたとしても、そこには我々が常識的な目で結ぶよりも遥かに強烈でユニークな焦点が結ばれ、独自の聖書的磁場が形成されていた可能性が高い。

だが初めに記したように、この点についても結論を急ぐことは避けよう。我々にはまだ、その後フォードルが修道院で演じる壮絶な「最後の一幕」を見なければならぬ(G)。また聖母祭の日、二番目の妻ソフィアと、彼女が熱烈な愛と信を注ぐ聖母マリア像に対して彼が示した驚くべき振る舞いにも光を当てなければならぬ(H)。フォードルが「聖なるもの」と女性に向かう姿勢について、またその瀆神的道化の在り方について、プラスとマイナス両極の方向に目を向けつつ、まずは一つ一つのエピソードの出来るだけ柔軟で多角的な考察を積み重ねることが我々の本来の課題である。

## **G. 「最後の一幕」。**おのちちあくま**「己が父悪魔」からフォードル、そしてイワンへ** 道化的インスピレーション

僧院における「毒蛇」の攻撃は終わりとはならなかった。ゾシマ長老の跪拝によってパニックに、否、聖なる戦慄感ヌミミノウゼに捕らえられた人々が草庵から逃げ帰った後のことである。帰途に就くべく呼び寄せた馬車が到着するや、突如「インスピレーションに駆られた」フォードルが踵を返し、「最後の一幕を演じて差し上げよう」と乗り込んだのは自宅とは全く逆の、今度はゾシマでなく修道院長が催す昼食会であった。そしてこの男の道化芝居は修道僧たちの偽善の弾劾、修道院の存在の否定という「最後の一幕」に行き着くのである。この壮絶な一幕については、彼の最後の「捨て台詞」を以って説明に代えよう。

「な、お坊さま方！あなた方は何故に精進なさるのか？何故にそれに対するご褒美

を天国に期待しておいでなのか？そんなご褒美にありつけるのなら、私だって精進しますぞ！駄目です、お偉いお坊さま方よ。修道院などに引き籠り、上げ膳据え膳、天国でのご褒美など期待するのはいけません。この世で徳を積み、社会に益をもたらすのです。その方がはるかに難しいことですぞ」(二八「スキャンダル」)

ゾシマ長老の草庵での集まりから、修道院長による歓迎の宴席での「最後の一幕」へ。「崖から飛び降りる」ように、遂に激しい修道院批判とその否定にまで行き着いたフォードル。この時この道化を支配していたものとは、恐らくは強烈な緊張と興奮と毒念、そして何よりも神聖冒瀆がもたらす目の眩み心の痺れるような悪魔的快感、毒蛇の陶醉だったに違いない。ゾシマ長老が与えた「<sup>スミノオーザ</sup>聖なる戦慄感」と呼応するかのよう、フォードルを「<sup>インスピレーション</sup>悪魔風」が吹き抜け、その瀆神的道化芝居は最後の極点に達したのである。

### フォードルからイワンへ、悪魔の系譜

さてここでもう一度、先にフォードルがヨハネ福音書により自らの出自を「悪魔」だとした視点に戻り、フォードルからイワンそしてスメルジャコフに至るカラマーゾフ家の、いわゆる「悪魔の系譜」を確認しておこう(E)。修道院でフォードルが演じた「最後の一幕」から見る時、イワンの本質もまた天使アリョーシャと同じく、ひたすら「神と不死」を探求する真摯な青年であると共に、父フォードルに劣らず「悪魔の子」としての際立った相貌を持つ悲劇的逆説的存在でもあることが浮かび上がるであろう。この青年とは父フォードルが内に深く宿す虚偽、存在の「嘘」とそこから生まれ出る悪魔的否定の精神を、修道院を舞台とする瀆神的道化芝居の次元に留めることなく、思想的にも行動的にも極限にまで自覚化して煮詰め、遂には修道院のみか神とその「<sup>まこと</sup>眞」、<sup>キリストの愛</sup>「キリストの愛」の否定にまで行き着く「ロシアの小僧っ子」なのだ。

イワンが行き着く先はここに留まらない。「<sup>おの ちちあくま</sup>己が父悪魔」の否定の精神を「太古からの定め」として深く内に宿すことを自覚するこの青年は、やがて他ならぬ自分自身を神とするまでに至る。「地質学的変動」の思想である。そして「人神」となったイワンは故郷の家畜追込町に乗り込み、「一切が許されている」との思想を、異母兄弟スメルジャコフを「<sup>おの ちちあくま</sup>前衛的肉弾」として、遂には父親殺しを以って表現しようと謀るのだ。「<sup>おの ちちあくま</sup>己が父悪魔」に発するフォードルの道化芝居から、その「悪魔の子」たち二人による父フォードル自身の殺害へ。イワンとは、フォードルが道化芝居に用いたヨハネ福音書を介して見る時、正に悪魔の系譜を正面から受け継ぐ嫡出子に他ならないことが明らかとなるのである。

「<sup>おの ちちあくま</sup>己が父悪魔より出でて、<sup>おの ちち よく おこな</sup>己が父の慾を行はんことを望む」  
 「<sup>かれ はじめ ひところし</sup>彼は最初より人殺なり」  
 「<sup>まこと なか ゆえ まこと た</sup>眞 その中になき故に眞に立たず」  
 「<sup>いつはり ごと おのれ かた</sup>虚偽をかたる毎に己より語る」

これらヨハネ福音書が伝えるイエスの痛烈な批判の言葉は、自らを十字架上の死に追いやるユダヤ人たちを指して投げつけられたものであるが、これらは同時にフォードルその人に当てはまるのみならず、いささか酷になるが正にその息子イワンにも当てはまるものであり、モスクワ時代のイワンが行き着く思想と行動の本質を予言するばかりか、『カラマーゾフの兄弟』が蔵する根本テーマの一つ、人間が「己が父<sup>おの</sup>悪魔<sup>ちちあくま</sup>」と手を結んで試みる「聖なるもの」の否定と拒否という「反逆」の本質を鮮やかに浮かび上がらせるものとさえ言えるであろう。父の聖書引用が父と息子の血の繋がり、悪魔の系譜を明らかにする。ここにあるのもフォードルの道化芝居が持つ悪魔性と同時に、逆説的認識の豊饒という皮肉であろう。(イワンが担う意味の深さと広がりには限りがない。「神と不死」の熱烈な探究者である「ロシアの小僧っ子」イワン、この若者が現実<sup>カ</sup>に悪魔と手を組んで辿る没落の道という悲劇的逆説については、『カラマーゾフの兄弟論』の第V章と第VII章Bを参照。また次回の「研究会便り(3)」においては、前回の「研究会便り(1)」の延長線上で、イワンの神探求の思索の道程とその意味について、聖書のユダヤ人間論とドストエフスキイ文学との係わりという視点から、改めてもう一度検討する予定である)

#### 更にスメルジャコフへ

ところでこの悪魔の系譜はフォードルからイワンで終わるものではない。イワンを更に凌駕する悪魔性を前面に打ち出し、イワンからは「前衛的肉弾」と目されつつも、いつの間にか彼を呑み込み、最終的には父親フォードルの脳天を叩き割るのが異母兄弟スメルジャコフであることを忘れてはならない。このもう一人の「悪魔の子」が自らの出生の悲劇と不公正を呪い、世に対して試みる復讐劇について。またこれら二人の異母兄弟が父親殺しの後、共に追い込まれる恐るべき「悪業への懲罰<sup>カ</sup>」と、神との出会いのドラマについて。またイワンがスメルジャコフを「絞首台」に追いやる新たな兄弟殺しの悲劇について。そしてまたアリョーシャとスメルジャコフという異母兄弟間の交流と、シリアの聖イサクが果たす役目について。更には自らの命を絶ったスメルジャコフに対して捧げられるアリョーシャの鎮魂歌について等々・・・これらイワンとスメルジャコフを中心として、カラマーゾフの兄弟たちが辿る恐るべき、また胸を打つ一連の死と再生劇が『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスとなるであろう。(拙著『カラマーゾフの兄弟論』の第V章と、殊に第VII章を参照)

#### H. フォードルと聖母マリアとの対決

「コニャックを飲みながら」

「場違いな会合」が終わった後のことだ。フォードルとイワン父子は家畜追込町の屋敷に戻り、ドミートリイの延々と続く「告白」を聴き通したアリョーシャも、追って父の家

にやって来る(第三篇「好色漢たち」)。夕食の場でのスメルジャコフを中心とする「論争」と、その後父フォードルが「コニャックを飲みながら」、息子イワンとアリョーシャとを相手に交わす「神と不死」を巡る会話については省略しよう。結局は「否定」に行き着くこの問答の後のことである。酔いの回ったフォードルの口からは「子豚同然の小僧っ子」「身体の内には血の代わりに未だ乳が流れている」アリョーシャとイワン、「殻の剥けていない」二人の息子に向かって彼独自の女性論が、つまり「好色漢」たる父親の内面が露骨に曝け出される。

「俺にとっては醜女など存在しない。女でありさえしてくれれば、それだけでもう問題の半分は解けているのだ」(三 8)。

恥ずかしげもなく開陳される蘊蓄。フォードルの圧倒的独壇場である。

### ソフィアの思い出(1)

コニャックがすっかり回った父親の脳裏に、アリョーシャとイワンの母ソフィアの思い出が甦る。二人の息子を相手に新たに語り出されるのは、フォードルでなければ持ち得なかったような、またフォードルでなければ語り出せないような妻ソフィアとの愛情生活の一齣である。「狐憑き」とされる「宗教的痴愚」の母を、夫が普段は決して見せなかった思いがけない優しさで突然責めたて始める。跪き、立て続けになされる足への接吻。遂にソフィアが言い表し難い喜びの笑い声を上げる。その喜びとは、翌日には必ず狐憑きの叫びに移行するような種のものであった。狐憑きの宗教的痴愚の内に秘められた女としてのソフィア。フォードルは言う。自分はどんな女についても、その女でなければならぬ急所を見つけ出す腕を持つのだ。母親について、父親からこのような話を聞かされた息子たちの心中を押し量ることは止めよう。

### ソフィアの思い出(2)

フォードルの思い出話は、更に二人が結婚をした年のことに及ぶ。彼は一度だけ、妻のソフィアを侮辱したことがあるのだと言う。聖母マリアの祝祭日のことだ。ひたすら祈りの人であったソフィアは殊に聖母祭を重んじ、この日は夫をも彼の部屋に追いやってしまうのであった。この神懸かりを追い払ってやらねば！フォードルは妻と聖母マリア像とを前にして宣言する。今からお前が信心するこの聖母像に唾を吐きかけてやる。罰など当たるものか。殺意を含んだ眼差しを夫に放ったソフィアは、飛び上がるや両手を打ち合わせ、顔を覆いながら全身を震わせ、床に倒れ伏すとそのまま気絶してしまう。

驚くべきことが起こる。この話を聞いていたアリョーシャが、母と全く同じ反応を示し始めたのである。狐憑きの叫びを上げ、両手を打ち鳴らし、顔を覆ってなぎ倒されたように椅子に倒れ掛かり、突然声にならぬ涙にむせびつつ、ヒステリーの発作さながらに身体

を痙攣させ始めたのだ。驚愕に陥れられたフョードルはイワンに、口に水を含んでアリオシャに吹きかけてやるよう呟く。「これは自分の母親のことで、自分の母親のことでな・・・」。説明を試みようとする父親に対し、イワンは叫ぶ。「しかし僕の母親もまた、彼の母親と同じだったと思いますかね、どうですか?」。怒りと侮蔑に満ちた声。そしてキラリと輝く目。フョードルは身を震わせる。筆者は父親がこの瞬間、アリオシャの母がイワンの母でもあるという事実を全く忘れ去っていたかのようにであったと記す。

### フョードルの両極性

このエピソードが含む意味は少なくない。しかし今は注意を専らフョードルに向けよう。彼は言う。ソフィアと初めて出会った時、「俺はその罪穢れのない目に<sup>カミソリ</sup>剃刀で魂をブスリとやられた」。この「罪穢れのない目」を持つ狐憑きの妻、宗教的痴愚ソフィアが内に宿す聖性と、彼女が全身全霊を以って祈る聖母マリアの聖性。これら二人の女性が宿す聖性を、フョードルはこの上なく鋭敏に察知していたのだ。ところが聖母マリア祭の日、そのソフィアによってフョードルは、一人聖なる世界から締め出されてしまったのである。聖母マリア像に「唾を吐きかけてやる」こと、そして妻の「神懸かりを追い払ってやる」こと。聖母像の前に立ったフョードルは、妻ソフィアの女性としての存在と、彼女の「聖なるもの」としての存在とを共に自分のものとすべく、絶望的な悪魔的試みに打って出たのだ。

その後フョードルが演じ続けた道化芝居の一切は、この聖母祭の日に演じた神聖冒瀆劇の延長線上にあるものと考えられることも可能であろう。「聖なるもの」への牽引と反発、好奇心とシニシズム、独占欲と破壊衝動。道化フョードルの内に蠢く両極性が浮かび上がる。ここに視点を置く時、最初の妻アデライーダの死の報知に触れての、歓喜と悲嘆とを混交させた叫び。またガリラヤの女性に重ねての、聖母マリアの聖性への絶対の讃美と、その地上的肉体性への興味の表出。更には妻の足元に跪いての接吻と、聖母マリア像への冒瀆。そして何よりも聖者ゾシマにぶつけられた瀆神的道化芝居と、最後に行き着いた痛烈な修道院批判。これらスキャンダラスな言動の全ては、「聖なるもの」に「剃刀で魂をブスリとやられた」フョードル、「聖なるもの」を前にして「肯定と否定」の両極に魂を引き裂かれたフョードルの、その分裂の自虐的道化的表出と見て初めて納得のゆくものとなるのではなからうか。

更にここから見る時、「神と不死」を激しく求める「ロシアの小僧っ子」イワンが、神を弾劾し否定し、更に「キリストの愛」をも否定し、その末には自らを神とするに至ったこともまた、父と同じ位相のもとに置かれる可能性を持つと言えよう。つまりフョードルもイワンも共に、「聖なるもの」の前に立ち、それへの「肯定と否定」に魂を引き裂かれ、遂には否定の道をどこまで歩き通せるかに賭けた「悪魔の子」であるという、先から見てきた悪魔の系譜が改めて確認されるのである(E,G)。

### 二つの「カラマーゾフの血」

さて聖母祭になされた、母に対する父の恐るべき神聖冒瀆行為。これを聞かされた二人の息子の心に去来したものは何であったのか。しかし繰り返すが、我々はこのことで徒に悪しき心理分析に踏み込むことは控えよう。ここではイワンとアリョーシャ二人の兄弟の内にも、「父親譲りの好色漢、母親譲りの宗教的痴愚」という二つの「カラマーゾフの血」が色濃く流れていることを確認すれば十分であろう。作者ドストエフスキイは、ラキーチンとドミートリイとを相次いで証人として用い、稀に見る<sup>おおくて</sup>晩生青年である天使アリョーシャにおいてもまた、この事実との正面からの対決が開始されたことを記す。つまりこの真摯な求道青年の内にも「地上的で、凶暴で、むき出しの力」の蠢きがいよいよ顕在化し始めているのだ。そして遂にアリョーシャはリーザに向かい、「この力の上にも神の霊が働いているのか、それさえ僕には分からない」「僕はひょっとして神を信じていないかもしれない」と、内なる分裂の開始を正直に告白するに至るのである（『カラマーゾフの兄弟論』第Ⅵ章「<sup>ナドリュフ</sup>Надрыв(激情の奔出)」参照）。そして何よりも注意すべきことに作者は今、これら二つの血はカラマーゾフの兄弟たちの内ばかりでなく、他ならぬ彼らの父と母二人の内にもそれぞれ色濃く流れていたことを、当のフォードル自身に表白させたのである。

容易には相容れない二つの「カラマーゾフ血」の浄化・聖化と統合という課題。父も母も、そして自分たち自身も共に、この課題の前に立つ人間であることを知らされた兄弟二人が、これから辿るべき道は長く険しいものであろう。事実既に「神と不死」の熱烈な探究者であるアリョーシャとイワン自身が、リーザという少女を間に挟んで深刻な愛の分裂の内に投げ込まれつつあり、またイワンとドミートリイとはカチェリーナを挟んでいよいよ苦悩の度を深め、更にまたドミートリイとフォードルとはグルーシェニカを巡って、正に生と死を賭けた戦いを繰り広げつつある。ドストエフスキイは「神と不死」の問題と愛の問題両面において、この作品の登場人物たち全員を深い分裂と激しい苦悩の内に投げ込んでいるのだ。『カラマーゾフの兄弟』とはこれら二つの「カラマーゾフの血」を巡り、登場人物全員が分裂に苦しむ、いわば変数を多数抱えた不定方程式のようなものと言えよう。そしてこれら二つの「カラマーゾフの血」の問題については、他ならぬ父フォードルこそが、他の息子たちの誰よりも深く激しい混沌の内にあり、しかも他の誰よりも大胆かつ破壊的かつ豊饒にその混沌の生を生きているとさえ言い得るのかも知れないのである。

## おわりに

### <sup>カオス</sup>混沌体フォードル

今回はカラマーゾフ家の家長フォードルが聖書知識を駆使した道化芝居を追い、そこから浮かび上がる様々な問題を検討してきた。冒頭で記した通り、ドストエフスキイが刻んだフォードル像はやはり容易に整理や統一的な概念化を赦さないものである。だが聖書を介して彼の道化芝居を見てゆく時、そこから彼の独自の内面の諸相が浮き彫りにされてくることも事実である。つまり女と酒と金にまみれた生活を送るフォードルもまた、「ロシア



の小僧っ子」アリョーシャやイワンと同じく、あるいは彼らを逆さ写しにする形で、「神と不死」の問題を深く内に抱えた存在であること、そしてまた息子たちに劣らず、否むしろ彼らよりも色濃く熱く「聖」と「俗」、二つの「カラマーズフの血」を分裂のまま脈打たせて生きる混沌体であることが明らかとされるのである。

混沌体フォードル。彼が息子のアリョーシャに、その自らの内面を素直に語り聞かせる場面を見ておこう。「場違いな会合」の後フォードル宅に場を移し、父と息子たちが信仰を巡る「論争」や「問答」を次々と繰り広げ、更にはあの聖母マリア祭の思い出も語られた翌日のことだ。嵐の後の束の間の晴れ間。自分の許を訪ねてきたアリョーシャに向かい、フォードルは意外とも思われる率直さと露骨さを以って自分の心の内を語り始めるのだ。

「俺もまだ今のところは男で通る。まだ五十五だ。だが俺はまだ二十年は男でいるのだ」(四2)

続いて語られるのは、そのためにも是非金が必要なこと。そして世の偽善者たちとは違い、自分は大っぴらに「汚穢」の内に生きること。その向こうにある「死」や「天国」のことなどは自分には考えられないこと。ひとたび眠ればもう目を覚まさない、それで一切は終わりであること等々。世の人々の度肝を抜く道化芝居を繰返すフォードルの、唯一心を許す息子アリョーシャを前にしての、このあたりが偽らざる内面の吐露だと考えてよいであろう。全ての問題が未解決の混沌のままに存在し、飽くことなく燃え続ける強烈な生命力によって運ばれてゆく。それがフォードルの生きる現実であると言えよう。

### 「巢窟」

イワンは父を「イソップ爺」とも「毒蛇」とも呼ぶ。「毒蛇」の生命力が運ぶ深い混沌体フォードル。その生の内と外の諸相のどこに焦点を絞るかで、思わぬ豊饒なものともこの上なく貧困なものともなって、フォードル像は大きく異なった姿を我々の前に現わすであろう。我々は今回この混沌に、専ら聖書を用いた瀆神的道化芝居という角度からアプローチを図り、結果としてその逆説的豊饒性も視野に入れる可能性を確認してきたのであるが、最後に作者がフォードルの淫蕩生活を表わす語として用いた「巢窟」という語に改めて着目し、この語が持つ象徴性をデッサンし、そこからこの混沌体への新たなアプローチの手掛かりを得ることで、小論を終えよう。

既に見たようにフォードルは、二度の結婚のいずれの場合にも、妻に死なれるや直ちに子供たちを「忘れ去り棄て去り」、我が家を快樂の「巢窟」と化してしまったと記される。この「вертеп ヴェルテップ」というロシア語には、『岩波ロシア語辞典』(1973年版)によれば、大きく分けて四つの意味があるという。

- ① 「洞窟」
- ② 「隠れ家、巢窟」

③ 「キリスト生誕のあやつり芝居を見せる覗き穴」

④ 「そのあやつり芝居、キリスト生誕劇」

筆者は以前『罪と罰』論において、江川卓氏による「ヴェルテップ」劇の説明(江川卓、『ドストエフスキー』、岩波新書、1984)を紹介し、次のように記したことがある。「ロシア、特にウクライナには上下二段に設けられた舞台で「聖」と「俗」の両面からドラマを同時進行させる、いわゆる「ヴェルテップ」劇と呼ばれる人形芝居が存在していた」(『「罪と罰」における復活—ドストエフスキイと聖書』、河合文化教育研究所、2007)。『罪と罰』論では、この作品世界が正にヴェルテップ構造そのものを持つことを論じたのである。

ドストエフスキイが描くカラマーゾフの世界もフォードルの生もまた、典型的な「聖」と「俗」のヴェルテップ構造の内にあると言えるであろう。ドストエフスキイはフォードルを飲んだくれの好色漢かつ吝嗇漢として、酒と女と金の飽くことなき追及に没頭させ、その住まいを淫蕩の「巢窟」と化させる一方、彼に「聖なるもの」への鋭敏な感性も付与し、「神と不死」の問題に対して無関心では置かせず、イエスを巡る女性に目を向けさせ、また妻ソフィアの「罪穢れのない目」に胸を抉らせる一方、彼女の前で聖母マリア像に唾を吐きかけさせ、また長い間ユダヤの民の間で生活をさせる等々、この人物を深々と聖書的磁場の内に置き、その内なる「覗き穴」から聖書世界の「キリスト生誕劇」を飽くことなく見つめる存在としても造形していると言えよう。「вертеп ヴェルテップ」という語はそのまま、「聖」と「俗」の混沌体フォードルを表現する象徴性を担うと言っても過言ではないのだ。

更に言えば、フォードルの瀆神的道化芝居によって我々は、聖書世界とカラマーゾフ世界に展開するドラマが共に、果たして神によってなされる究極の人間救済劇、つまりは聖なる「キリスト生誕劇」であるのか、あるいは単なる悪魔の「あやつり芝居」でしかないのか、その「一切か無か」の「世界的な」「永遠の」問いの前に立たされるのだと言えよう。しかもフォードルが演じる瀆神的道化芝居とは、既成のキリスト教的思考の枠を踏み越えた地平で、否、むしろ遠く深く悪魔の否定の世界にさえ足を踏み入れた混沌の中で、改めて人間が「神と不死」の問題と如何にぶつかり得るのかという問いの前に我々を立たせるのだ。そして人間の心の内に如何にして「聖なるもの」が宿され、イエス像が構成されてゆくかという問題を、フォードルはゾシマ長老やアリョーシャとは全く違った破格の形で我々に提示し、それは一見悪魔的ニヒリズムとシニズムの色を帯び、瀆神的道化芝居の形をとりつつも、結局は逆説的豊饒性を孕んだドラマとして展開すると言えよう。

作者自身が言う「何かある種独自の民族的桁外れ」フォードルが内に宿す力と意味が、その奥行きと拡がりをも十全に開示するのは、我々自らがこの男のシニズムとニヒリズム、その瀆神的道化芝居の背後に、「キリスト生誕劇」の多層性と逆説性と豊饒性を積極的に読み取ろうとする時であり、フォードルに劣らず大胆に我々自身の内なる「洞窟」に身を投げ入れ、自らの内なる混沌と対峙する時であろう。(了)

相京様

以下に、

1. ドストエフスキイの写真に付加して頂く説明文。
2. 「研究会便り」に掲載された文章についての転載・使用についてのルールの確認文。

これら二つを記しますので、適当な場所を選んで載せて下さい。

## 1. ドストエフスキイ最後の肖像写真

### 1889.6.9. M.M.パノーフ撮影

[今後ドストエフスキイ関係の写真・  
 図版を順次紹介し、それらについて、  
 コメントもつけてゆく予定です]

## 2. 「ドストエフスキイ研究会便り」に掲載される文章について。

これらは当座、基本的には全て芦川が書き下ろす文章や論文、あるいは講演記録の加筆修正等から構成されます。それゆえ、これらを大学や大学院等のレポートや論文に、更には一般の論文等にも引用・転載等をされる場合には、ご面倒でも河合文化教育研究所にその由を連絡して頂き、芦川の承諾を得て下さるよう、お願い致します。

上の二つにつきましては、掲載の場所や具体的な割り付け等、相京さんにお任せしますので、よろしくお願い致します。2.について記しましたのは、今までも河合塾の先生や教え子たちの中に、無断で私の文章をテキスト教材や大学のレポート等に利用した例がありましたので、一度しっかりと注意を促しておいた方がよいと判断したためです。

次回の「研究会便り(3)」は、既に八割が出来ていますので、残りは二週間後に河合塾の授業が終了してから取り掛かり、8月中にはお渡しできると思います。尤もその残りの二割が、なかなか上手くゆかず、「蕎麦屋の出前」になる危険は相京さんご承知の通りです・・・しかし牧野さんの志を私なりに受け継ぎ、この河合文化教育研究所と「ドストエフスキイ研究会便り」を、教育の現場から生まれた一つの具体的な文化の形として、将来の若者たちのために残しておきたいと思っています。先日もお話しましたが、「俺たち、やったよな!」という昔懐かしの姿勢は、私は大嫌いです。今日の前にある問題を前に、今日の前にいる若者たち、将来を担う若者たちの内に、ドストエフスキイという「一粒の麦」の種を少しでも蒔いておきたいと願っています。改めて相京さん、高橋さんにもご協力をお願い致します。

2016/6/28/火曜日

芦川